購入した少女の性器破壊を楽しみます

暗闇魍魎

この作品はR18描写を含むため、18歳未満の方は閲覧禁止です。

HinaProject Inc.

注意事項

　このＰＤＦファイルは小説家になろうグループサイトで掲載中の作品をＰＤＦ化したものです。
　このＰＤＦファイルおよび作品の取り扱いについては、小説家になろう利用規約が適用されます。そのため、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止いたします。作品の紹介や個人用途での印刷および保存にはご自由にお使いください。

【作品タイトル】
　購入した少女の性器破壊を楽しみます

【Ｎコード】
　Ｎ３０５９ＪＡ

【作者名】
　暗闇魍魎

【あらすじ】
　先日、購入した玩具“さやか“は、まだ若い女性だ。
私は、さやかを鞭で打ち調教していく。そして……。
※かなり前に書いた短編を見つけたのでアップしてみました。タイトルはついていなかったので新しくつけてみました。

上（前書き）

以前、書いた短編です。

前からこんな仕様もない物、書いてたんだな（T＿T）

上

上

「性器が一番楽しめると思います。」

私の質問にさやかは恥ずかしそうに小さな声で答えた。

「女の子にとって性器はとても大切で一番敏感な場所なんです。その性器を痛めつけていただけば女の子はとても惨めな気持ちになりますし、少しの責めでも痛くて苦しくて泣き叫ぶしかないと思います。」

さやかは言いながら自分の白いミニスカートの裾に手を掛けるとゆっくりと捲り上げた。黒いパンティストッキングに包まれた形のいいさやかの太ももが露わになっていく。

「それに女の子の性器は本当に様々な拷問で痛めつけやすい形をしていますから飽きずに楽しむ事が出来ると思います。私、女の子の性器は痛めつけていただくためにだけ存在していると思うんです。」

私の玩具の一つになった先日購入したばかりのさやかは顔を赤く染め恥ずかしそうに話す。

「私、女の子に生まれて良かったです。女の子だから御主人様に性器を痛めつけて貰って楽しんでいただくことが出来るんです。」

私は匂い立つようなさやかの黒いパンストに包まれた太ももに眼を

奪われていた。

「どうぞ私の性器を容赦なく痛めつけて私の無様に泣き叫ぶ姿をお楽しみ下さい。」

スカートを捲り上げるさやかの手はこれから自分の性器に加えられるであろう数々の拷問の恐怖のため震えている。それでも自らスカートを捲り上げねばならないさやかの哀れな姿が私を一層興奮させた。

「どうぞ御覧ください。」

とうとうミニスカートを腰まで捲り上げたさやかが羞恥心で顔を赤らめながら言う。さやかは黒いパンティストッキングの上に純白の股上の深い綿の女児用パンティを穿いていた。その純白のパンティは私好みものでそれが幼児体型のさやかにも良く似合っている。黒い太ももと白い下腹部。そのコントラストが私をさらに興奮させた。私がさやかの女の子らしい形のよい恥丘に吸い寄せられるように股間に顔を近づけると、さやかは大きく足を開いた。私の目の前でさやかの股間が無防備に晒される。私はさやかの小さく震える太ももに手を掛け股間に鼻を付けると匂いを嗅いだ。さやかの匂いも私好みのものだった。パンティの上からさやかの股間を口付けする。

「あっ」

小さく声を漏らしたさやかは自分の股間が舐めやすいように腰を突き出す。私はさやかのパンティの股間部を丁寧に舐めると次にパンストに包まれた太股の内側もじっくりと舐め回す。そして、私はさやかのこの大切な部分を痛めつける残酷な拷問を考えていた。

「あっ恥ずかしいです・・」

消え入るような声がさやかの股間を舐める私の頭上から聞こえる。同時に股間を舐める私の舌にパンティから染みだしたさやかの愛液の味がひろがる。さやかの味も私好みのものだった。

「あっあっ・・」

さやかの息が荒くなり小さな声が漏れる。さやかは自らスカートを捲り足を開き晒した股間を私に刺激され今度は興奮のため身体を震わせていた。

「き、気持ちいいですぅ・・」

さやかはさらに大きく足を開き、スカートを捲り上げていた両手はそのままパンティも掴み引き上げている。そのため白いパンティはさやかの割れ目に食い込み一層淫靡な匂いを発しだす。

「あぁ、私の性器、私のものじゃなくなったみたいなんですぅ・・」

自慰することも許されず育成されたさやかは初めての快感に溺れそうになるのを必死に耐えていた。そんなさやかに私は放尿するよう命じ、さやかの股間に口を押し付け太ももを抱え込んだ。さやかが下腹部に力を入れるのが分かる。

「で、でますぅ・・」

さやかが羞恥で消え入りそうな声で呟くと私の口中に生暖かい液体が入ってきた。私はパンティとパンティストッキング越しに溢れるさやかの小便を味わいながら、鼻でさやかのクリトリスを刺激し続

ける。

「私、おしっこ飲んでいただいてるぅ」

さやかは股間に口を付けられ小便を飲まれるという初めての経験に興奮し頂点に達しようとしていた。私はさやかの小便を飲みながら、パンティ越しにも固く勃起しているクリトリスをさらに激しく鼻で刺激する。

「あーーーーっ」

絶叫したさやかは小便を漏らしながら失神していた。

私は覚醒したさやかに乗馬鞭に似た短い鞭を見せた。これは私がさやかを痛めつけるため発注した特別の鞭である。さやかに最高の苦痛を与えるため細くしなやかな造りで、どんな体制からでも最大の威力が発揮出来るよう短く造られていた。その鞭を目にした瞬間、羞恥で顔を赤らめていたさやかがたちまち青ざめる。それでもスカートのファスナーを降ろすと、震えながらミニスカートを脱ぎ両手を万歳のように挙げ足を大きく開いた。

「怖い、怖いですぅ。女の子の大切な性器を鞭で打っていただけるなんて想像した事もなかったんです。」

さやかはこれから自分の性器を打ち据える凶悪な鞭を震えながら見つめている。

「私の泣き叫ぶ姿をお楽しみください。」

震えながらさやかは目を閉じ、激痛に耐えるため歯を食いしばった。

性器を鞭打たれるため震えながら足を開き立つさやかの哀れな姿が私の残虐さを加速させていく。私はさやかの前に立ち下腹部を見つめた。黒いパンティストッキングに包まれた下半身に白いパンティが淫靡に浮かび上がる。その白いパンティに包まれた形のいいさやかの恥丘の下の裂け目、さやかの大切な大切な性器に鞭を叩き込む。私は哀れにも性器を鞭打たれ泣き叫ぶさやかを想像し残酷な笑みを口元に浮かべた。

「怖い、怖い、怖い、怖い・・」

目を瞑り震えるさやかは繰り返し呟き続けている。私はそんなさやかの性器に下から鞭を思い切り打ち上げた。

「あぁぁぁーーーーーっ」

鞭の激しい打撃音とさやかの悲鳴が響き渡る。

「い、痛いぃーーっ」

忽ちさやかの両目から大量の涙が溢れ出す。私はさやかに構える間も与えず連続で性器に鞭を叩き込んだ。さやかの悲鳴と泣き声が心地よく響き渡る。

下

下

「痛い、痛いよぅ」

私は性器を鞭打たれ泣き続けるさやかの両手を掴み、後ろ手にきつく縛り上げた。そして、両足首に皮のベルトを巻き付け天井からのロープを取り付けさやかの小さな身体を逆さまに吊り下げる。

「あ・あ・あ・あ・・」

開脚され逆さに吊られたさやかは涙で汚れた顔を恐怖でさらに強張らせる。それでもさやかは私が自分の性器を鞭で打つことを楽しめるよう泣きながら腰を前に突き出す。その哀れなさやかの性器に私は鞭を思い切り打ち降ろした。

「あぁぁーーーーーっ」

今まで以上に凄まじい唸りを上げて性器に叩き込まれた鞭の激痛にさやかは絶叫する。可愛いさやかの顔が涙と鼻水と涎で無様に汚れ、逆さに吊られた小柄な身体は小刻みに震えている。

「ひぃぃぃーーーーっ」

私はさやかの他の部分には見向きもせず、ひたすら性器を鞭打ち続けた。そして、私は泣き続けるさやかにさらに激しい苦痛を与えるため、さやかのパンティとパンティストッキングの股間部分を切り

裂きさやかの性器を露出させた。

「あっ・・」

性器を晒されさやかは小さな悲鳴を上げる。それは性器を露わにされたことへ悲鳴ではなく、これから直接自分の性器に鞭が叩き込まれることへの恐怖の悲鳴だった。私はそんなさやかを嘲笑うようにさやかの太股に革ベルトを巻き付け、そこから伸びるゴムベルトのクリップにさやかの小陰唇を挟み込んだ。さやかの性器は両側から大きく拡げられ、クリトリス、膣前庭窟内に尿道、膣口とその中身を無様にさらけ出す。

「い、嫌、嫌ぁーーっ」

自分の想像を超える残虐な仕打ちにさやかは発狂したように泣き叫んだ。

「許してくださいぃ、怖いーーっ」

私はさやかの無様な姿に満足し、拡げられた性器に鞭を軽く当ててみた。

「ひぃぃーーーーっ」

性器に感じた鞭の冷たい感触だけでさやかは悲鳴を上げる。

「もう、ゆ、許してください・・」

私は恐怖で身体を震わせ哀願するさやかの拡げられた性器に顔を埋めクリトリスを舌で刺激した。さやかのクリトリスは再び固く勃起

し膣口からは愛液が溢れはじめる。

「そんな・・酷い、酷いよぅ・・」

自分の勃起したクリトリスを鞭で叩き潰される様を想像したさやかは恐怖で身体を震わせながらも、性器を舐められ興奮しはじめていた。

「やっぱり女の子の性器って痛めつけて貰うのが嬉しいんです。だってこれから酷いことしていただくのに私、恥ずかしい液が出てくるんです・・」

さやかは自分の哀れな姿に泣き出した。私は最後にさやかの愛液を吸うと口を放しゆっくりと鞭を構える。さやかは涙で滲む目で私を見つめていた。

「どうぞ私の嫌らしい性器を叩き潰してください・・」

息を荒くし泣きながらさやかは腰を前に突き出す。私はさやかの勃起したクリトリスに狙いを付けると笑みを浮かべ鞭を思い切り振り下ろす。鋭い風切り音に続き、さやかの剥き出しの性器を打ち据える激しい打撃音が響き渡り血が飛び散った。

「あぁぁぁーーーーーっ」

直接鞭を叩き込まれ凄まじい悲鳴を上げたさやかの性器は、激しい鞭の一撃で無惨に皮膚が破れ出血している。

「痛いぃ、痛いですぅ・・」

私は泣き叫ぶさやかの性器に続けざまに鞭を叩き込む。鞭が性器に叩き込まれる度、血が飛び散り凄まじい悲鳴が響き渡る。開脚逆さ吊りにされ性器を鞭打たれ泣き叫ぶさやかの哀れな姿が私に心地好い満足感を与えた。私は鞭を置き泣き続けるさやかを眺めてから近づくと鞭打たれたさやかの性器を覗き込んだ。膣前庭窟は血塗れになり左側の小陰唇は千切れかけていた。私はステンレスのハサミを使い、さやかの千切れかけた小陰唇をゆっくりと切り取っていく。

「ひぃぃぃーーーーーっ」

さやかの絶叫とジョリジョリと切り取られていく小陰唇の感触が心地よい。私はさらにカッターナイフを持つとさやかのクリトリスの下に刃を当てた。そして、そのまま力を入れさやかの柔らかな性器を切り裂いていく。

「いやぁぁぁーーーーーっ」

さやかの性器に一本の赤い線が出来たかと思うと、忽ちその線から血が溢れ出す。性器をカッターで切られさやかは発狂したように泣き喚く。

「痛い、痛い、痛いよぉーっ」

さやかの悲痛な叫びが私をさらに興奮させていく。あまりの興奮に私はさやかの上着を切り裂いていった。たちまちさやかの上半身は白いブラ一枚になる。私はさやかの白いブラに包まれた小さいが形の良い二つの膨らみを見つめた。そして、その白いブラも切り裂く。しかし、さやかは切り裂かれた性器の激痛で上半身を裸にされたことさえ気付いていなかった。

「うわあぁぁぁあぁぁ・・」

私は大声で泣き続けるさやかの前に処刑具を並べはじめた。鈍い光を放つニードルやノコギリ。ガラス瓶に入った怪しげな薬品類。それらが並べられていくにつれさやかの泣き声は恐怖のため小さくなっていく。私はそんなさやかにさらに絶望を与えるため、最後に言い残すことはないかと質問した。さやかはビクッと身体を震わせ涙で滲む目で私を見つめる。

「私、処刑していただくんですね・・」

震えながら問いかけるさやかに私は大きく頷いてみせた。

了

下（後書き）

ここで終わっているので、そのうち続きでも書いてみたいと思います。

今投稿している他のお話では破壊するまで書いていますが、この頃は書いてなかったんだなと自分でも驚きです。

ゆっくり気長にお待ち頂ければ助かります。

この作品の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
https://novel18.syosetu.com/n3059ja/

購入した少女の性器破壊を楽しみます

2024年12月29日17時23分発行